

(6) 三種町・鹿渡地区

① 取組内容と実施スケジュール

モデル自治体・地区では人口分析・推計に加えて現地調査・ヒアリング、2回のワークショップ、市町報告会を実施した。以下が実施概要である。

■現地調査・ヒアリング

・町役場担当者へのヒアリング

日時 2020年7月15日(水) 9:00-12:00

場所 三種町琴丘地域拠点センター

対象 企画政策課4名

・対象地区住民代表へのヒアリングおよび現地調査

日時 2020年7月15日(水) 13:00-15:00

場所 三種町琴丘地域拠点センターおよび鹿渡地区各所

対象 鹿渡地区ふれあいバス運営委員会代表ら3名

■ワークショップ(1回目)

日時 2020年9月3日(木) 18:30-20:30

場所 三種町琴丘地域拠点センター

参加 16名

■ワークショップ(2回目)

日時 2020年11月12日(木) 18:30-20:30

場所 三種町琴丘地域拠点センター

参加 16名

■三種町報告会

日時 2020年12月12日(土) 13:30-15:30

場所 三種町琴丘地域拠点センター

参加 33名

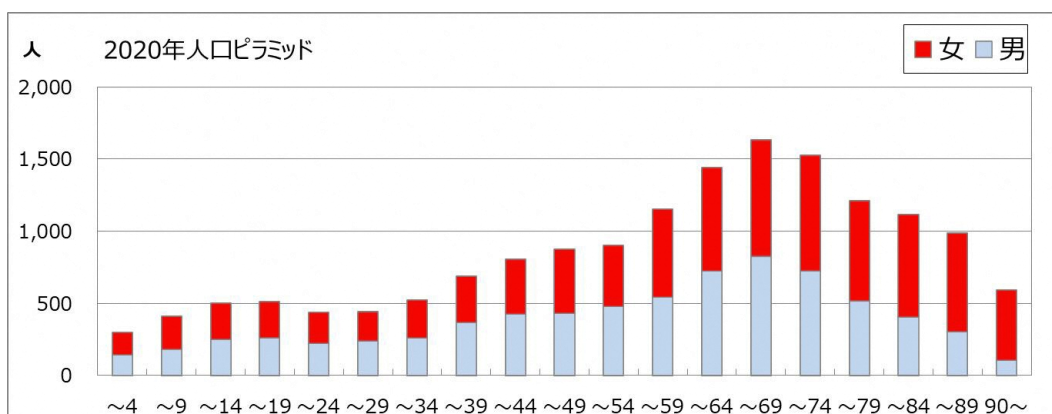
② 人口分析・推計（三種町全体）

委託機関が構築した人口推計シミュレーションプログラムを用いて三種町全体での人口の現状分析、パターン別人口推計シミュレーションを行った。

1）現状分析（2015～2020 年）

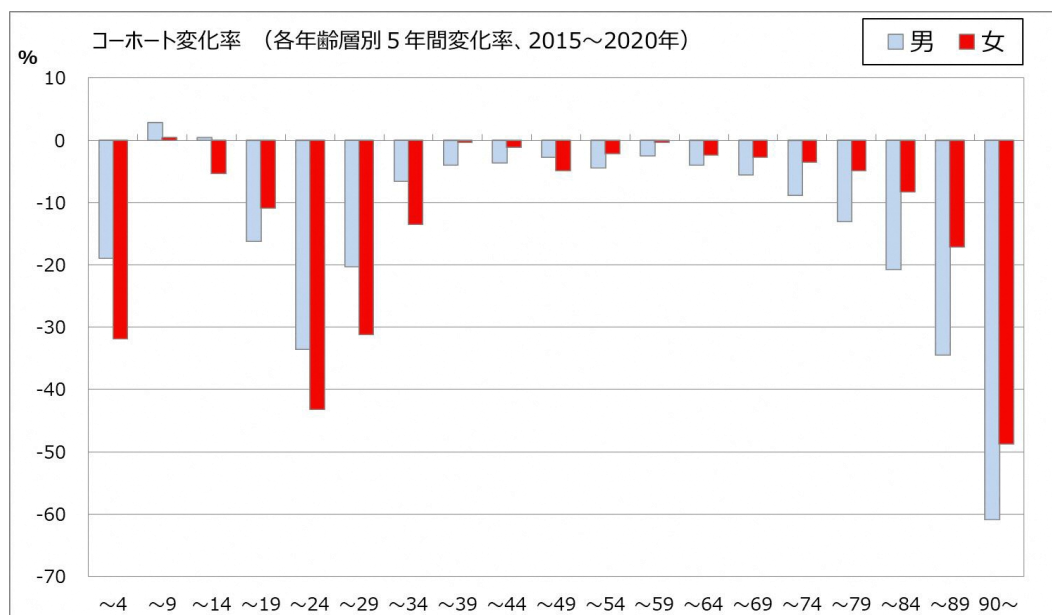
三種町全体の人口構成、過去 5 年間（2015～2020 年）の人口動態の推移を示す。

i. 年代別人口構成



60 代後半が最多の 1,630 人、次いで 70 代前半が 1,526 人となっている。最も少ないのは 0～4 歳の 298 人、その次が 5～9 歳の 409 人となっている。最少の 0～4 歳の人数は最多の年代（60 代後半）の 2 割にも満たないほど少ない状況となっている。

ii. 年代別コーホート変化率



これは 2015 年から 2020 年の 5 年間の各年代における人口増減を変化率で示したもので

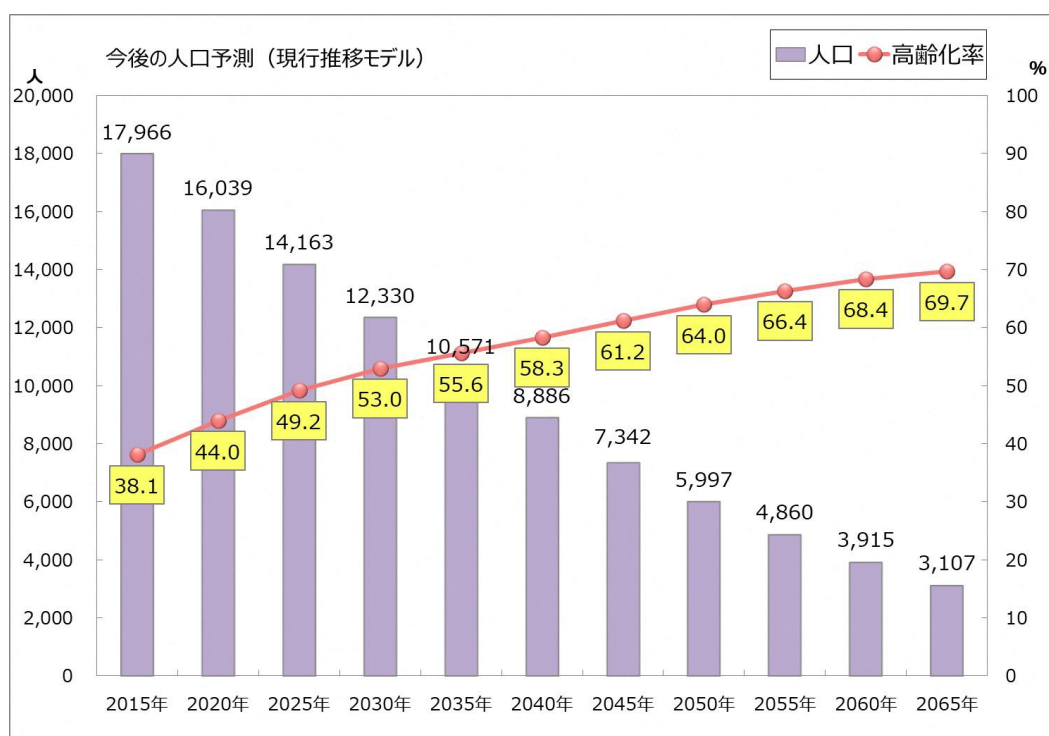
ある。例えばこの図で示される「～19」は「15～19 歳」の 10 代後半のことで、数値はこの年代の 2015 年時点の「10～14 歳」の人口と比較してどの程度の増減（主に社会増減）をしているかを表している（0～4 歳のみ 5 年前の比較が出来ないので各時点での人数を比較）。また、高齢年代の減少の多くは自然減である。

三種町では 5～9 歳男女、10 代前半男性で増加が見られ、30 代後半女性が 0.3%、40 代後半女性が 1.0%の微減であることから、2 世代での流入が推測される。しかし、出生率に影響される 0～4 歳の年代で大幅な減少であること、10 代後半～20 代全般にかけて大きく減少していること、その後の年代ではこの減少分を取り戻すことが出来ていないことから、対策が急務であることが分かる。

2) 現状推移シナリオ

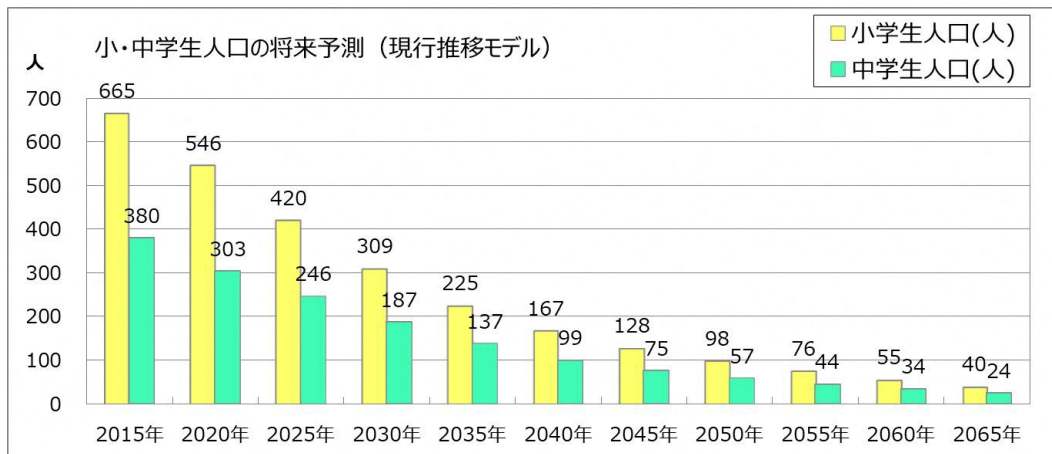
過去 5 年間（2015～2020 年）の人口動態が今後も続いた場合の人口推移を検討する。

i. 人口と高齢化率予測



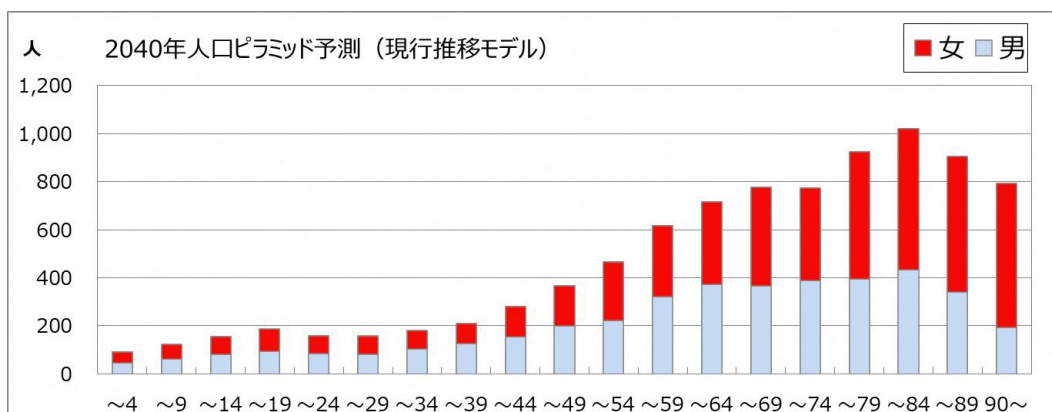
若年層を中心とした流出と高齢者割合の高まりから、高齢化率は 2065 年までに 25% 以上の上昇が予測される。人口総数は減少の一途で、2020 年比で 2040 年には 55.4%、さらに 2065 年には 19.4% まで減少すると推計されている。

ii. 小・中学生数予測



過去5年間の出生数や社会増減を基に予測する限り、小・中学生数も著しい減少となる。2020年比で2040年には31.3%、2065年には7.5%となり、人口総数以上の減少率と推計されている。

iii. 2040年（20年後）の年代別人口構成



最も多い年代は80代前半となり、その前後の年代が続く状態となる。若い年代になればなるほど各年代の人数は減少し30代後半より若い年代は200人未満となるほどに減少すると推計される。

3) 人口安定化シナリオ

人口安定化シナリオは合計特殊出生率、10代後半の流出率、定住増加数の3つの要素を組み合わせて検討する。人口の安定化には出生率と10代後半の流出率を改善させ、過去の若年層の人口流出を補うように、20代前半夫婦、30代前半子連れ夫婦、60代前半夫婦の3世代のバランスのとれた定住を増加させることが望ましいと思われる。

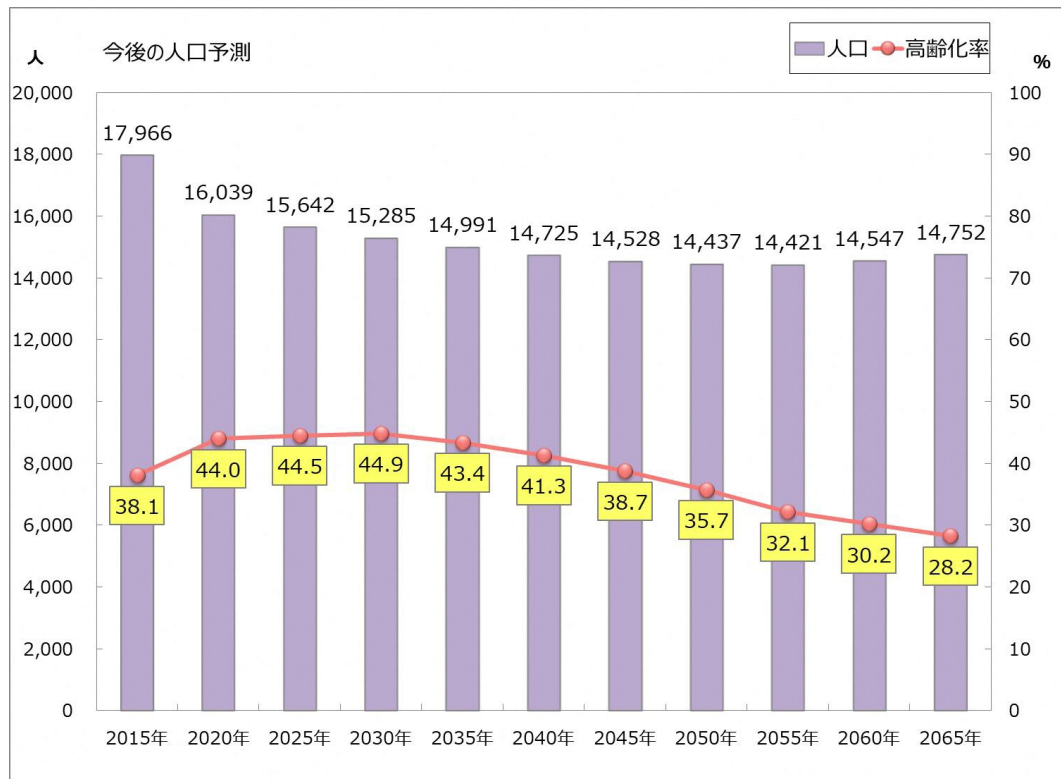
今回の組み合わせでは、出生率は2015年に策定された三種町人口ビジョンの推計に準じながらも、より緩やかに回復すると仮定し2040年には1.94、2045年以降は2.07へと段階的に上昇させる設定とした。10代後半の流出率は現状の半分となるように設定した（詳細は参考資料に記載）。10代後半の流出率を半分に抑制するという仮定は現実には多くの困難が予想される。しかしながら、この部分を具体的に検討する端緒となることを期待しこの設定とした。定住増加数の対象は20代前半夫婦、30代前半子連れ夫婦、60代前半夫婦の3世代として毎年各33.6組の誘致数とした。以上の条件設定で、出生率、流出率、定住増加数の3要素を組み合わせた人口安定化シナリオを検討する（下表参照）。

表 人口安定化シナリオの設定数値

合計特殊出生率（％）		10代後半流出率（％）		定住増加数・率/年	
年次	出生率		現状	設定値	
2020～2025年	1.52				各世代（世帯） 33.6
2025～2030年	1.63	男性	34	17	合計世帯数（世帯） 100.8
2030～2035年	1.73	女性	43	22	合計人数（人） 235.2
2035～2040年	1.83				2020年人口比（％） 1.47
2040～2045年	1.94				
2045年以降	2.07				

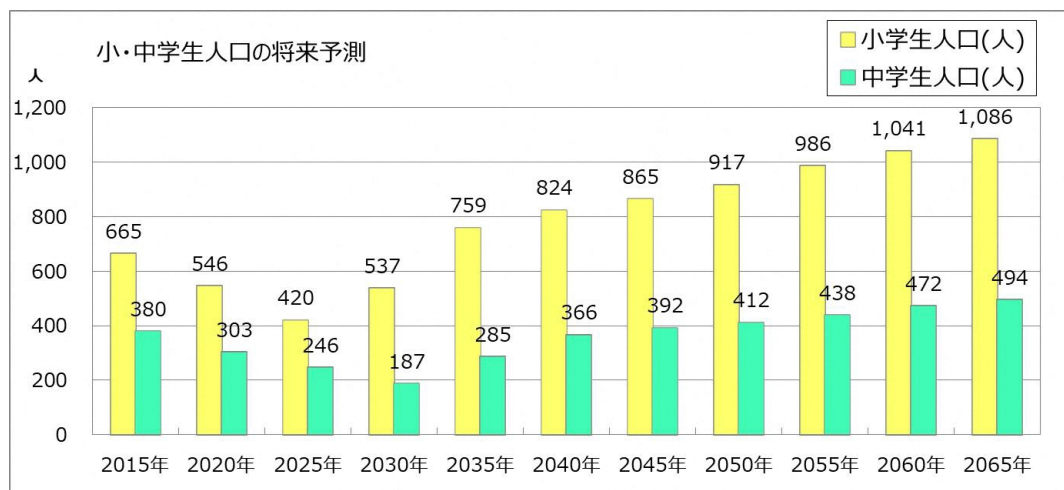
注：20代前半夫婦は1組（世帯）2人、30代前半子連れ夫婦は1組（世帯）3人、60代前半夫婦は1組（世帯）2人と設定。

i. 人口と高齢化予測



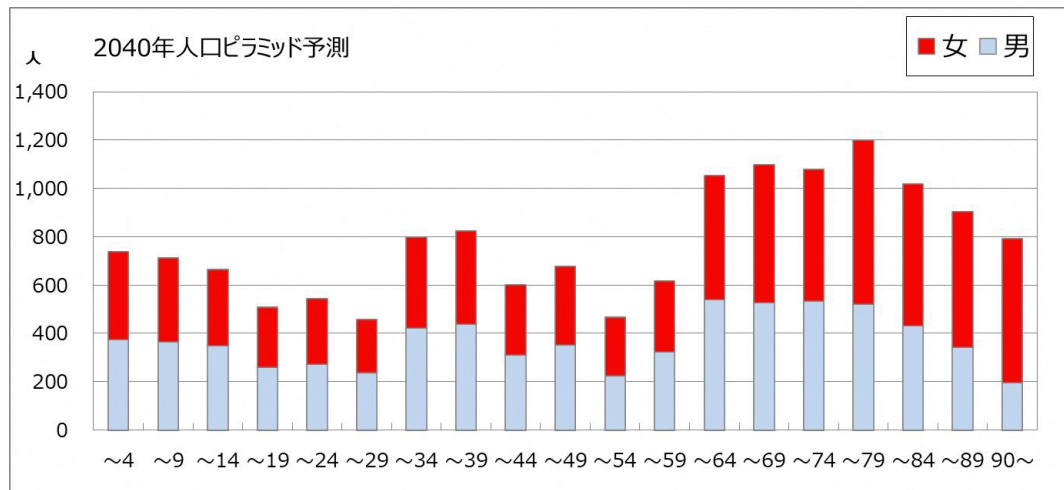
2020年人口の1.47%に相当する人数を毎年、呼び込むことが出来れば、人口総数、高齢化率ともに長期にわたり安定化が達成される。

ii. 小・中学生数予測



小・中学生数は、2030年頃からは増加に転じる。また、2030～2035年の間には現在の小・中学生数を上回る程度まで回復すると推計された。次頁に示す人口ピラミッドはこの年代層の取り戻しがあって初めて安定的な状態を示すものである。

iii. 2040 年（20 年後）の年代別人口構成



60 代前半と高齢者世代となる 60 代後半以降の年代に最も厚みがある。この年代層は地域活動の主力になる住民が多いので望ましいことである。それに加えて 30 代やその子どもの年代にもピークが表れるような構造になると推計される。

③ 人口分析・推計（三種町内全地区）

次に三種町内全地区における人口分析・推計結果を掲載する。その内、2015～2020 年の地区別コーホート変化率については一覧表で、それ以外の主だった分析・推計については地図上で色分けした図で表示する。

次頁に示した 2015～2020 年三種町地区別コーホート変化率の表からは人口動態は地区別に異なっており、それぞれの地区に適した独自の対策が必要であることが伺える。

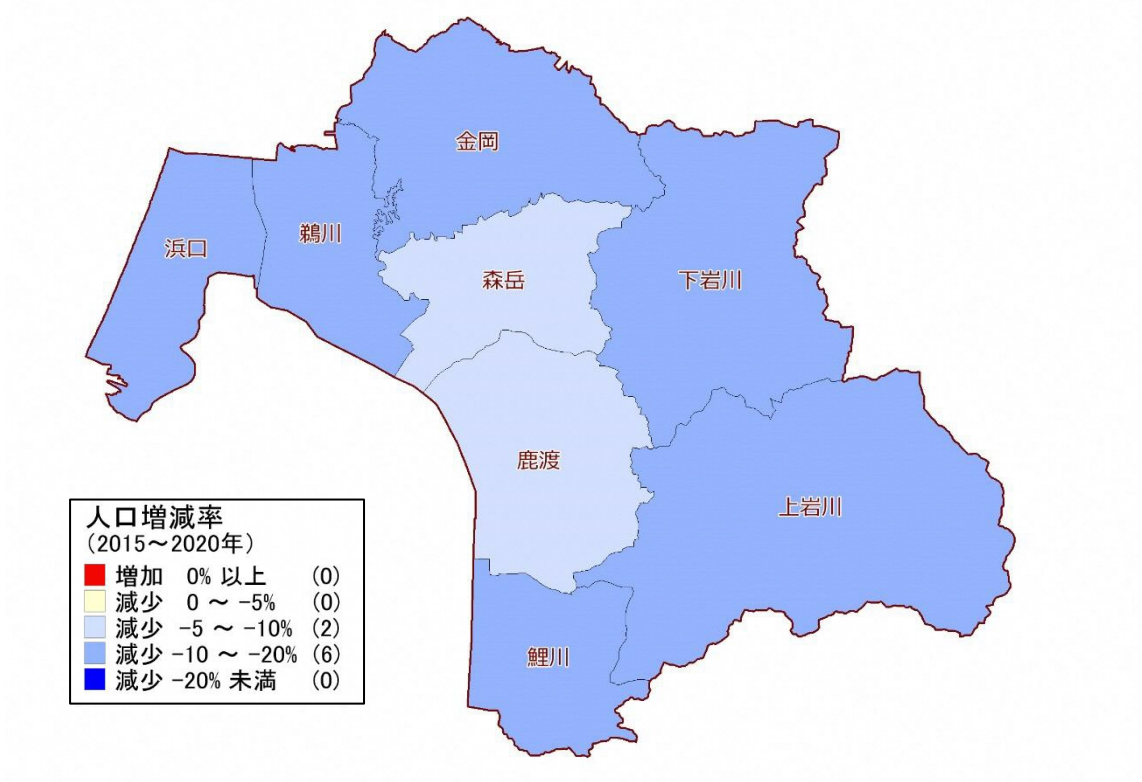
その次に図示した分析項目は人口増減率（2015～2020 年）、高齢化率（2020 年）、社会増減率（2015～2020 年）、4 歳以下増減率（2015～2020 年）、小学生増減率（2015～2020 年）、30 代女性コーホート増減率（2015～2020 年）、人口増減率予測（2020～2050 年）、2050 年に人口安定化を達成するために必要な毎年の定住増加率（2020 年人口比％）である。この分析・推計結果は町内全地区が表示された地図上に色分けして表示する。結果の評価については良い場合の暖色（赤色）から悪い場合の寒色（青色）まで段階的に表示している。

■2015～2020 年三種町地区別コーホート変化率

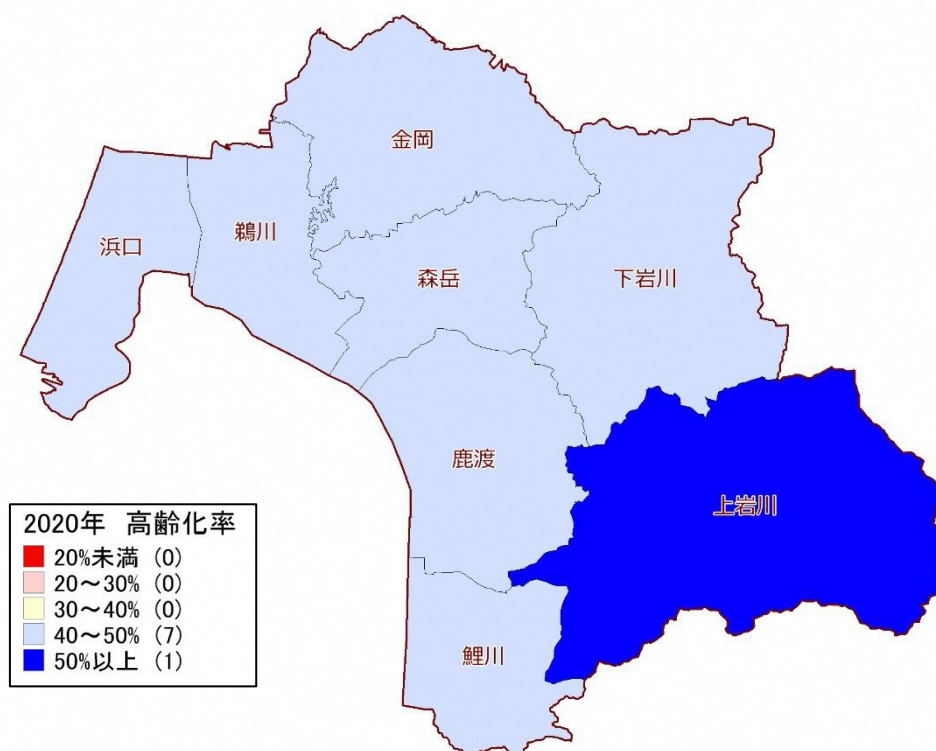
地域名	性別	0～4 歳	5～9 歳	10～ 14歳	15～ 19歳	20～ 24歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 39歳	40～ 44歳	45～ 49歳	50～ 54歳	55～ 59歳	60～ 64歳	65～ 69歳	70～ 74歳	75～ 79歳
上岩川	男	0.67	1.03	1.00	2.00	0.75	0.75	0.67	1.00	0.71	0.80	1.00	0.94	0.97	1.08	0.78	0.84
	女	3.00	0.50	1.33	0.67	0.50	0.88	0.33	0.67	1.20	1.25	1.00	0.95	1.00	1.04	1.00	0.93
鯉川	男	0.17	0.58	0.70	1.00	0.89	0.92	0.92	0.74	0.71	0.71	0.89	1.00	0.95	0.92	0.88	0.82
	女	0.25	0.75	0.77	0.83	0.40	0.80	0.56	0.75	0.82	0.92	1.07	1.00	1.03	0.95	1.00	1.00
鹿渡	男	0.89	1.29	1.10	0.79	0.63	0.90	0.92	1.03	0.93	1.00	1.01	0.99	0.99	0.92	0.94	0.89
	女	0.86	1.06	0.98	0.90	0.56	0.89	0.97	1.16	0.97	0.96	0.96	1.01	0.95	0.97	1.00	0.95
下岩川	男	0.60	0.90	0.83	1.05	0.75	0.53	0.71	0.82	1.04	0.97	1.04	0.94	0.87	0.95	0.88	0.94
	女	0.43	1.07	0.85	0.89	0.39	0.56	0.64	0.82	1.00	1.04	1.14	1.04	0.98	0.92	1.00	0.91
金岡	男	1.00	0.81	1.00	0.95	0.75	0.63	0.85	0.95	0.97	1.00	0.93	0.93	0.99	0.95	0.90	0.85
	女	0.63	0.82	0.98	0.93	0.54	0.45	0.89	0.80	1.10	0.99	0.95	0.99	1.02	0.96	0.95	0.85
森岳	男	0.95	0.97	1.06	0.76	0.74	0.88	1.04	0.97	1.14	0.96	0.96	1.04	1.00	0.93	0.97	0.85
	女	0.97	1.06	1.00	0.93	0.64	0.76	1.02	1.08	1.05	0.95	1.03	0.96	0.97	1.02	0.93	0.99
鵜川	男	0.85	1.18	0.97	0.73	0.57	0.80	1.02	0.98	0.93	0.97	0.90	0.99	0.95	0.97	0.89	0.90
	女	0.51	1.04	0.94	0.86	0.63	0.62	0.81	0.89	0.95	0.93	0.95	1.02	0.97	0.96	0.98	0.97
浜口	男	0.69	1.21	0.97	0.95	0.63	0.75	1.02	1.00	0.94	1.00	0.96	0.94	0.91	0.94	0.91	0.85
	女	0.52	1.06	0.91	0.89	0.56	0.59	0.89	1.19	0.93	0.91	0.95	1.00	0.97	0.99	0.93	0.98

注：コーホート変化率の計算方法は参考資料に掲載のとおり。

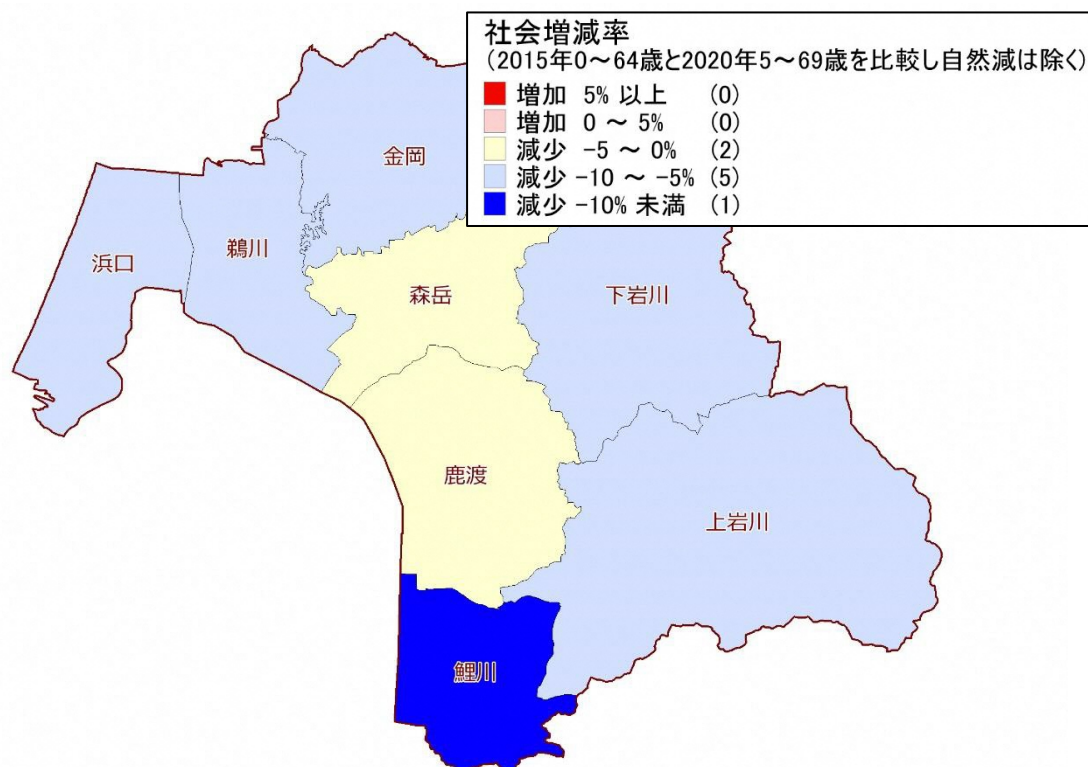
■人口増減率（2015～2020 年）



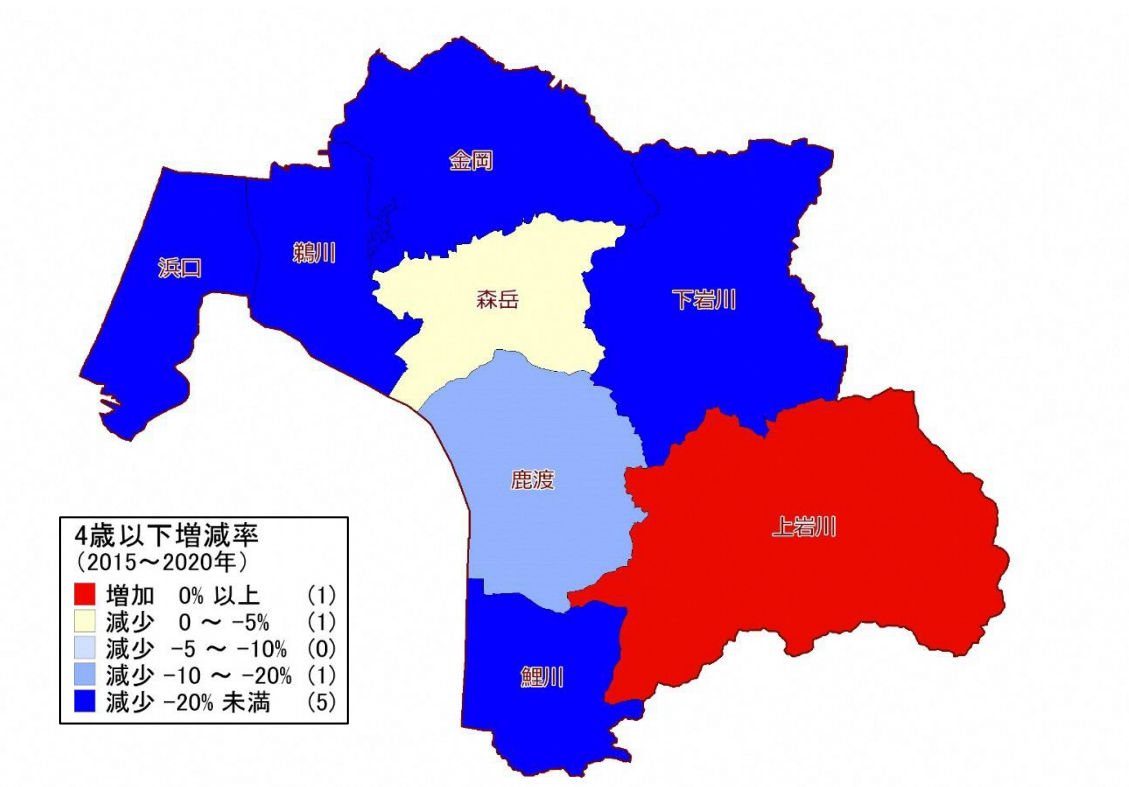
■高齢化率（2020 年）



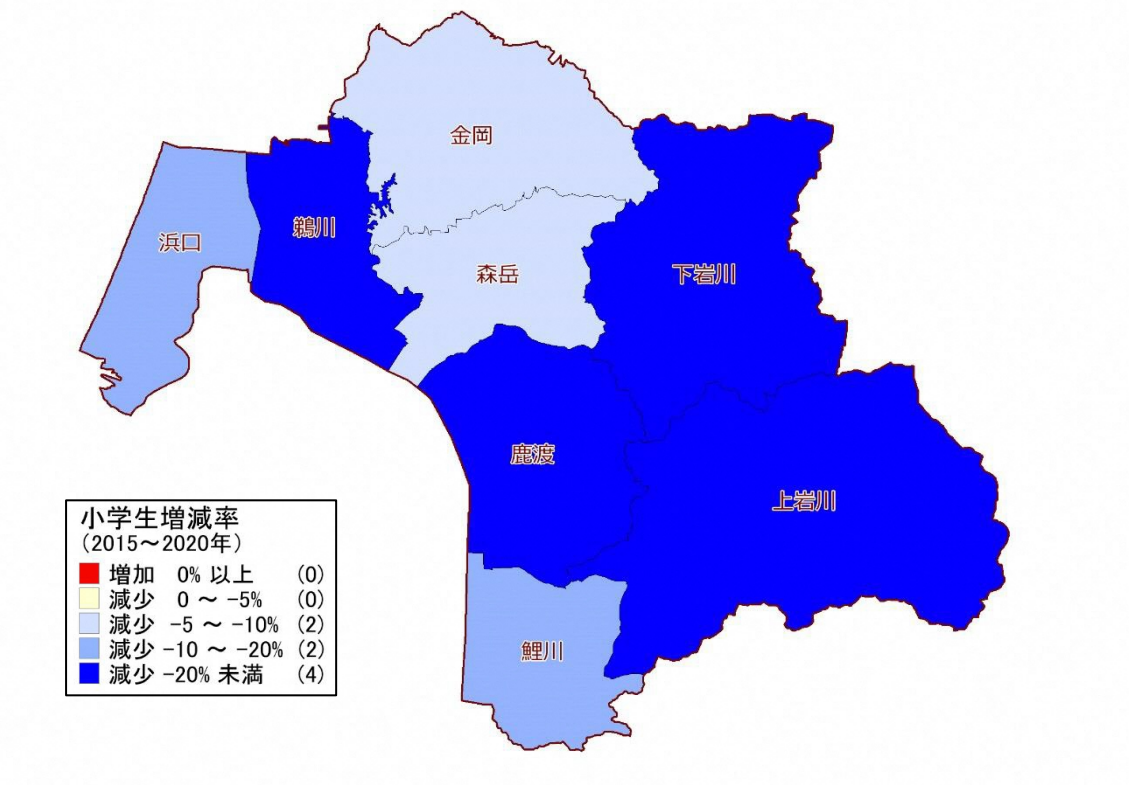
■社会増減率（2015～2020 年）



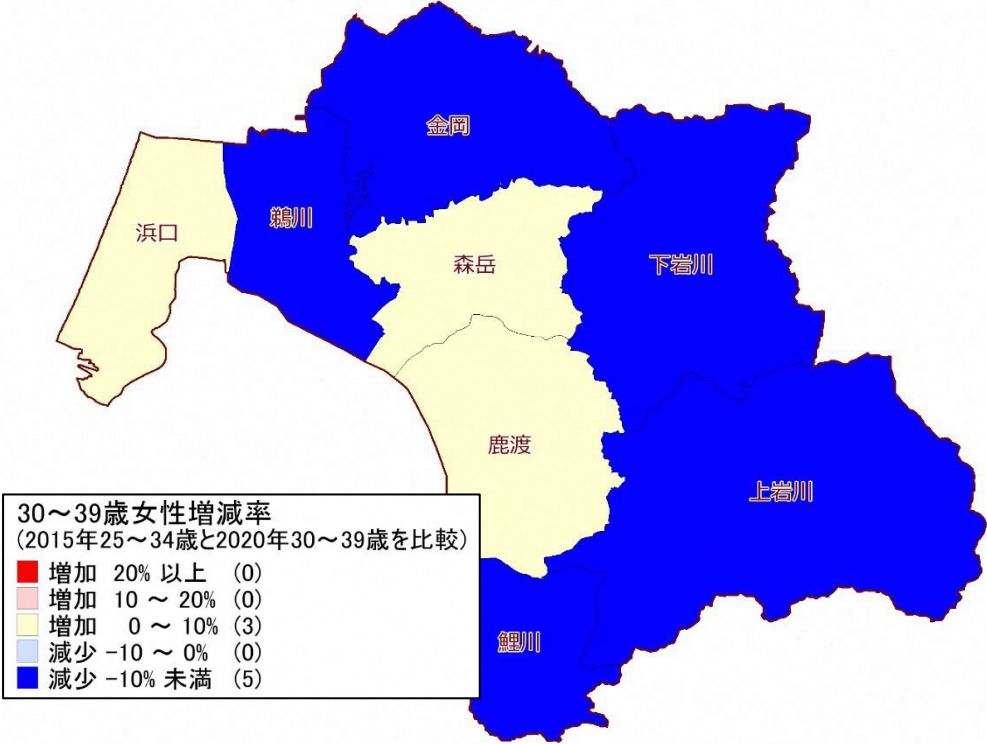
■ 4 歳以下増減率（2015～2020 年）



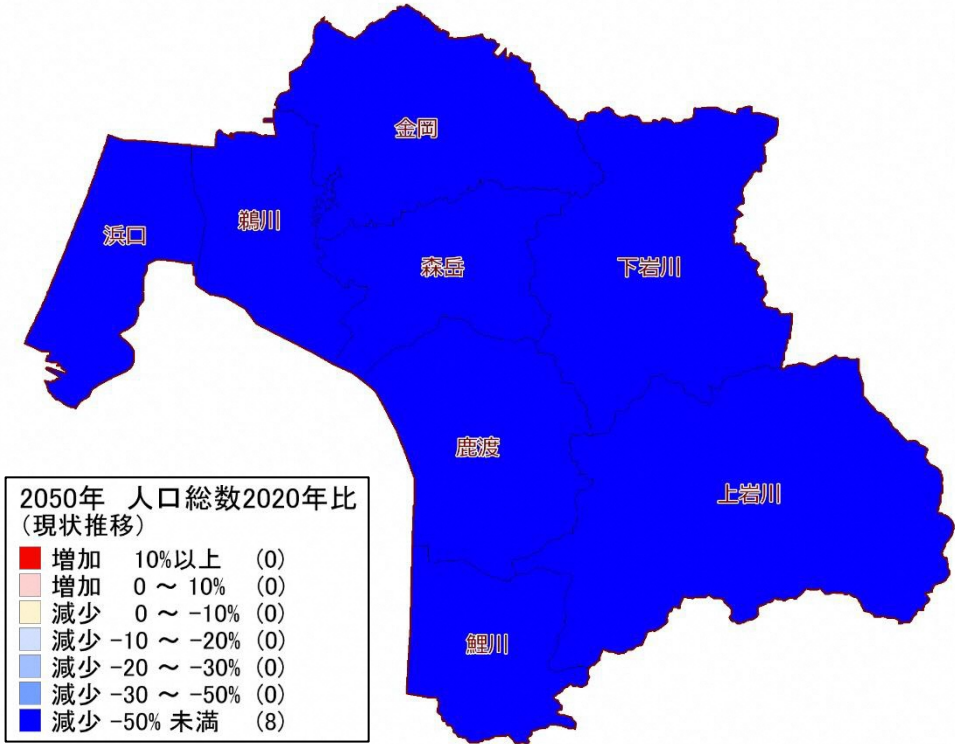
■ 小学生増減率（2015～2020 年）



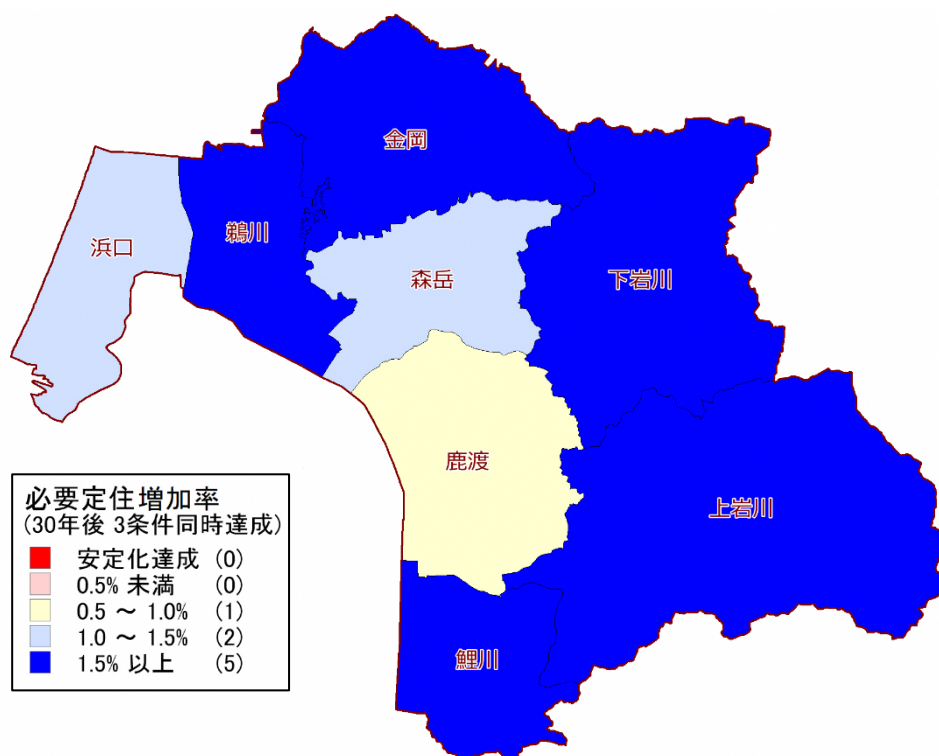
■30 代女性コーホート増減率（2015～2020 年）



■人口増減率予測（2020～2050 年）



■2050 年に人口安定化を達成するために必要な毎年の定住増加率（2020 年人口比％）



④ モデル地区（三種町鹿渡地区）の概要

三種町は8地区から構成されており、その内鹿渡地区をモデル地区として本事業を実施した。鹿渡地区は人口3,404人、1,435世帯、高齢化率44.1%（2020年12月当時）の地区である。また、ジュンサイの産地としても有名で各地に多数の栽培沼（池）がある。鹿渡地区は旧琴丘町の中心部で旧小学校区と同範囲の地区で21の自治会から構成されている。現在、地区内には琴丘小学校と琴丘中学校があるが学区としては鹿渡地区より広範となっている。中心部ということもあり、役場の支所機能と公民館を兼ね備えた琴丘地域拠点センターや、道の駅、直売所、スーパー等の店舗も多数存在していて生活する上では不便さはそれほど感じることはない地区である。コミュニティ活動に関しては老人クラブが弱体化し、その活動を自治会が担うようになったという声もあったが、行事等は自治会単位で行っており、自治会間で集まって活動するというところは今のところない地区である。

鹿渡地区にも関わる事で三種町における特筆すべき取組が2019年10月より実証実験が行われている地域内有償運送である。公共交通再編に伴い、ふれあいバスという名称で町内8地区の内、7地区で地区住民により運行されている（1地区はタクシー会社が運行）。このふれあいバスは各地区内を運行しながら町内の八竜ふれあいセンター、森岳駅、鹿渡駅のいずれかにアクセスし、この3カ所を巡回バスが運行するという形態を取っ

ている。鹿渡地区では住民有志による鹿渡地区ふれあいバス運営委員会が立ち上がり、ドライバー 6 名と事務局 1 名で運営している。固定客としてリピーターも見え始め、利用者は増加傾向にある。いつか自分も利用することになるという思いを持って運営委員会メンバーは運行に当たっているとのことである。

その他、地区内の団体や組織に関してはヒアリング調査から作成した地元関係図にまとめたので参照いただきたい。



ジュンサイの栽培沼



産地直売グリーンぴあ



ふれあいバス

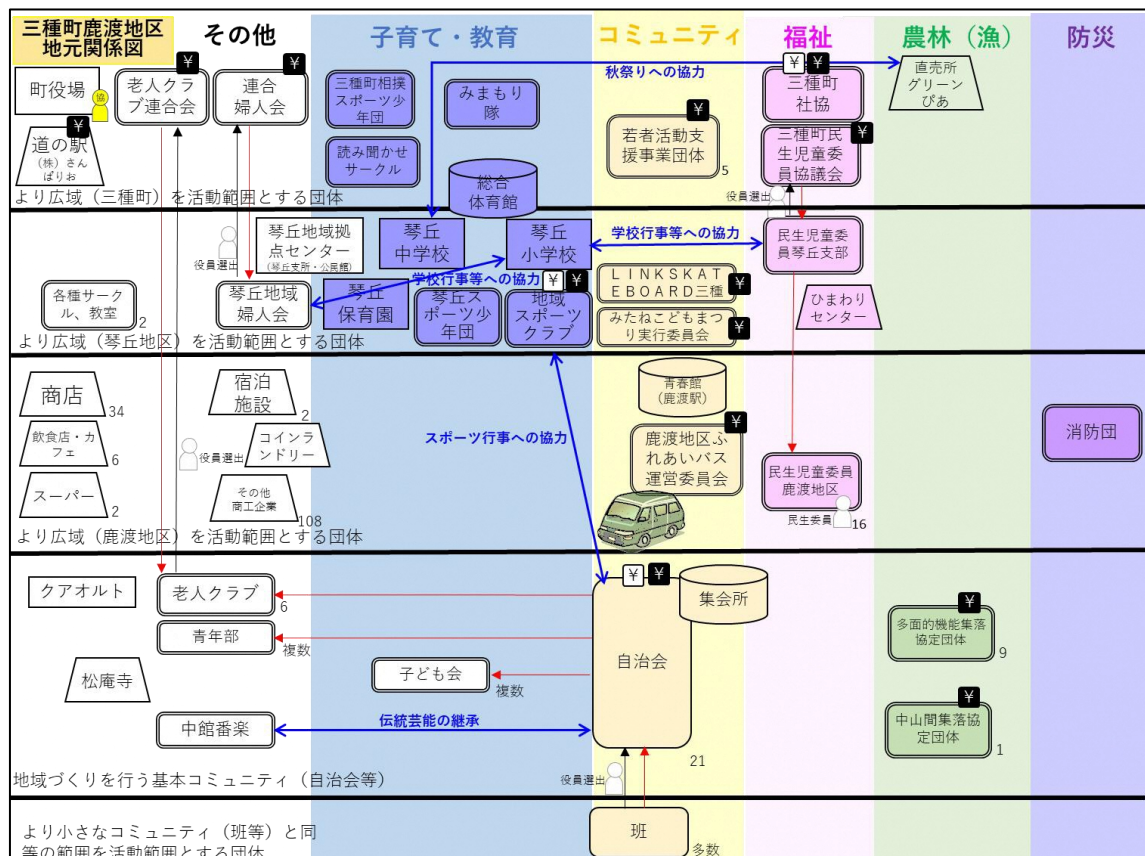


図 鹿渡地区の地元関係図

注：□の¥は地域住民から集めたお金、■の¥は行政からの交付金・補助金、赤い矢印は組織間のお金の流れを表現。

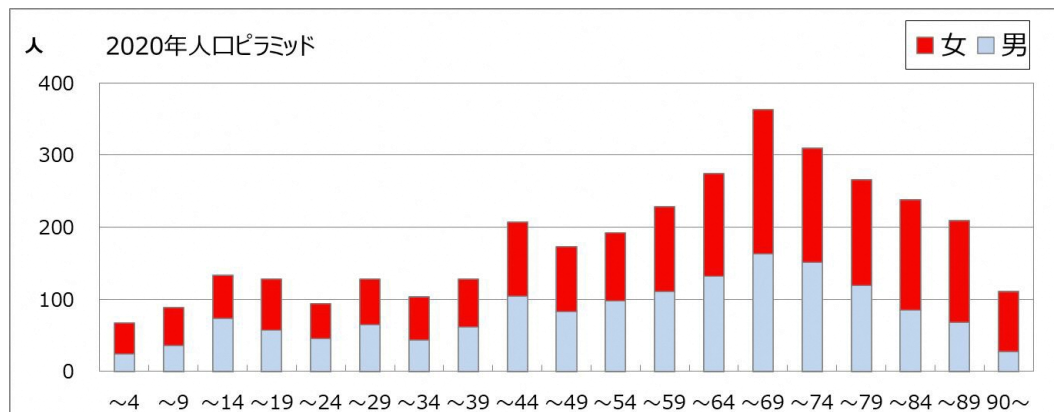
⑤ 人口分析・推計（三種町鹿渡地区）

三種町全体での人口の現状分析、パターン別人口推計シミュレーションと同様の分析と検討を鹿渡地区においても行った。

1）現状分析（2015～2020 年）

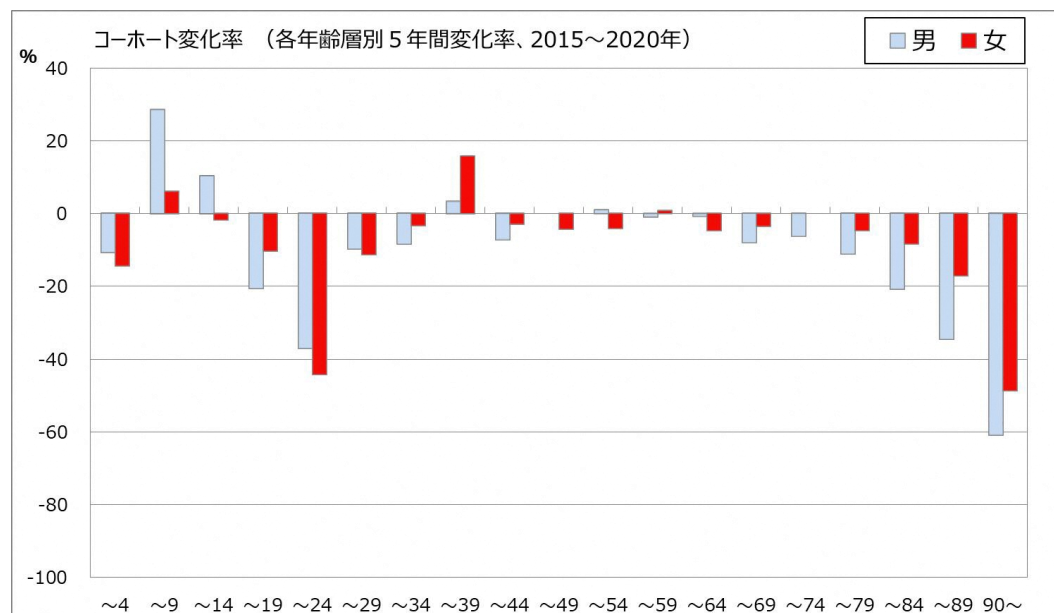
鹿渡地区における人口構成、過去 5 年間（2015～2020 年）の人口動態の推移を示す。

i. 年代別人口構成



最多は60代後半の364人、最少は0～4歳の67人となっている。20代前半や30代前半は前後の年代よりも人数を減らしているものの、どの年代を見ても女性割合が著しく低い年代は見受けられない。

ii. 年代別コーホート変化率

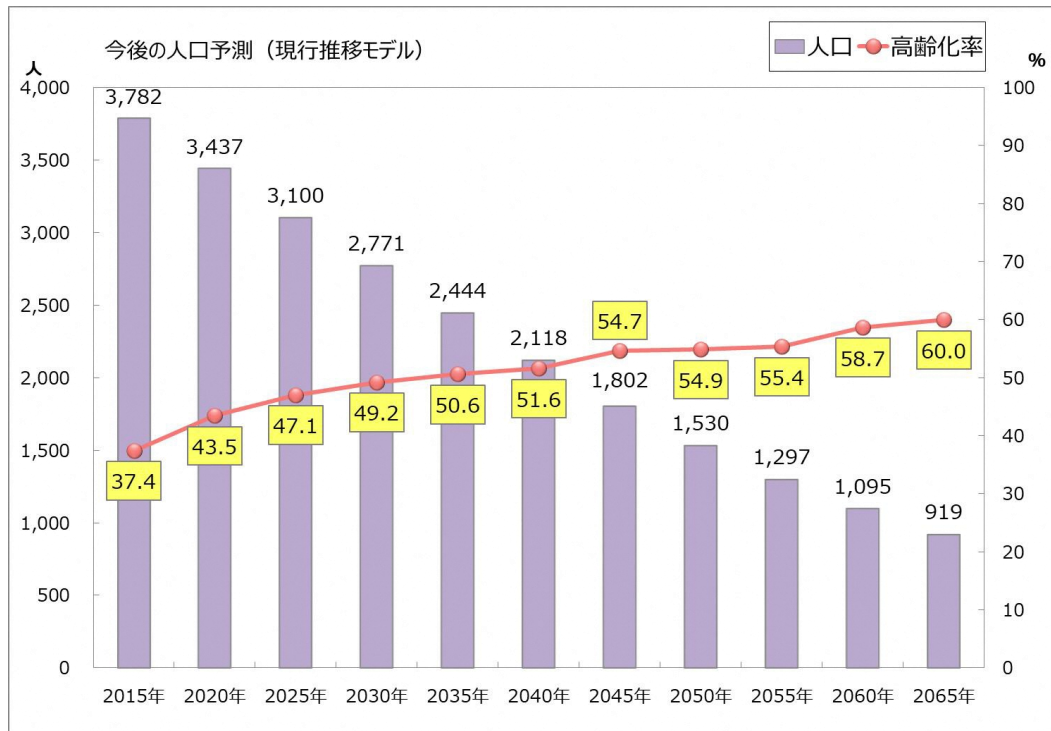


5～9歳男女、10代前半男性、30代後半男女、50代前半男性、50代後半女性が増加している。30代後半の年代が子どもを連れて流入していることが伺える。10代後半や20代後半の年代では比較的減少幅が抑えられているが、20代前半で約40%減少しており、この減少分を補うには至っていない。

2) 現状推移シナリオ

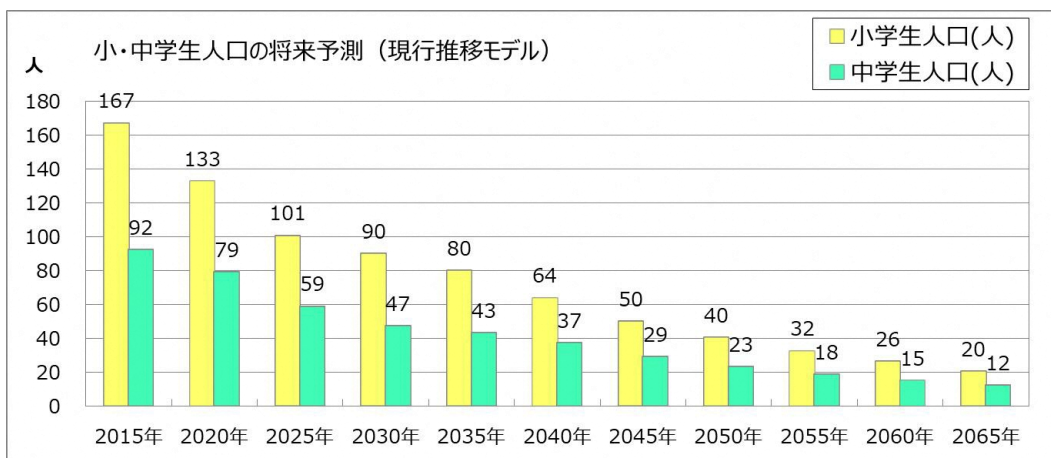
鹿渡地区における過去5年間（2015～2020年）の人口動態が今後も続いた場合の人口推移を検討していく。

i. 人口と高齢化率予測



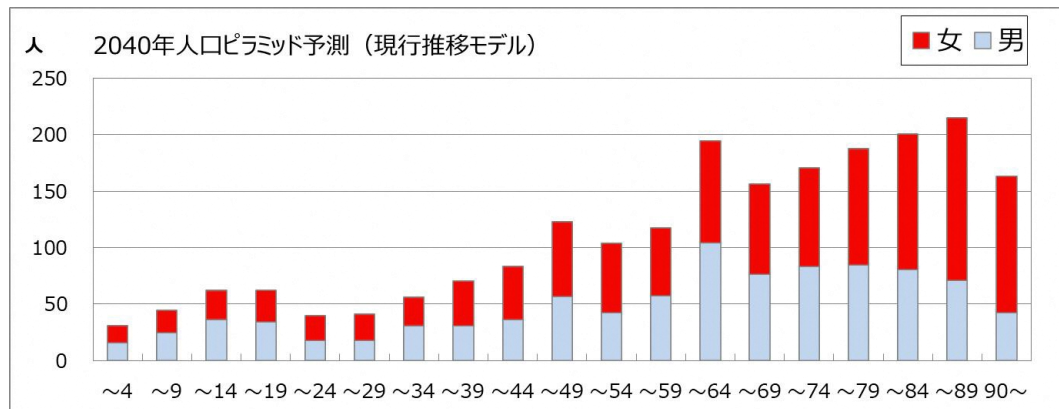
人口減少、高齢化は三種町全体と比べるとやや緩やかに推移していくと思われる。それでも人口は2020年比で2040年には61.6%、2065年には26.7%まで減少すると推計されている。

ii. 小・中学生数予測



小・中学生数は著しい減少となり、その減少幅は上記の地区の全人口と比べても非常に大きいものとなる。2020年比で2040年には47.6%、2065年には15.1%まで減少し、その実数は32人と推計されている。

iii. 2040 年（20 年後）の年代別人口構成



80 代後半が最も多い人口構成になると推計される。60 代前半や 40 代後半に比較的人数の多い年代も見られるが、0～4 歳や 20 代は特に少なくなるものと思われる。20 年後よりさらにその先は一層、厳しい人口構成になると推測される。

3）人口安定化シナリオ

三種町全体での検討と同様に鹿渡地区においても人口安定化シナリオを検討する。この検討には合計特殊出生率、10 代後半の流出率、定住増加数の 3 つの要素を組み合わせる。

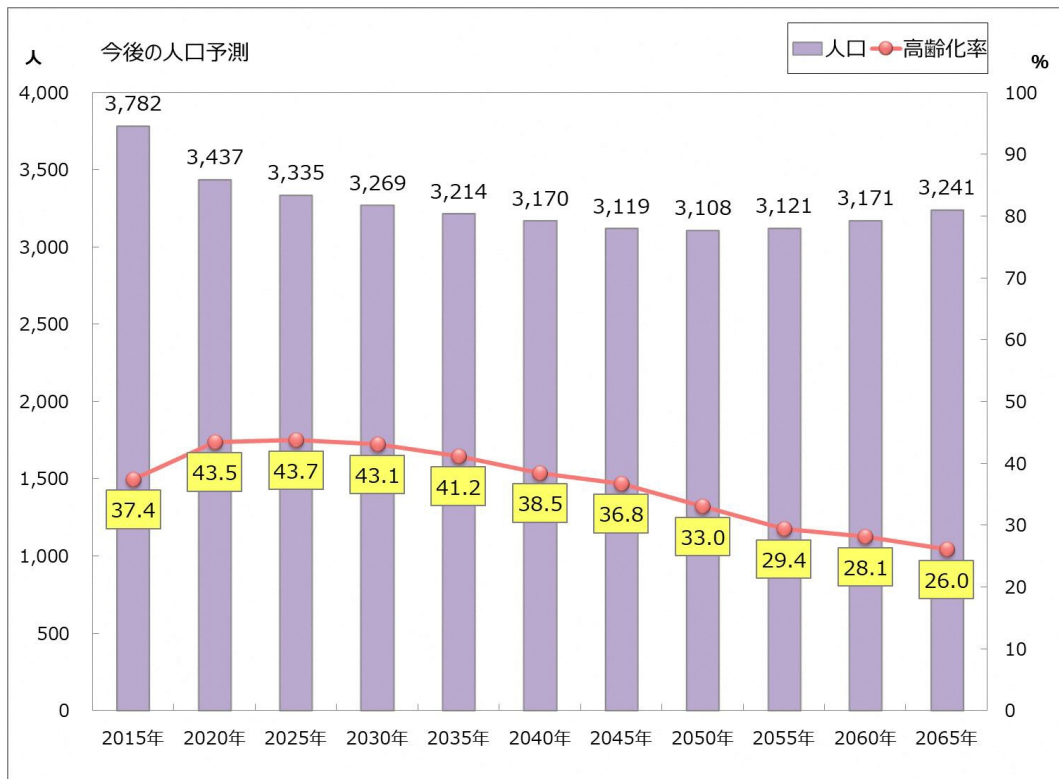
今回の組み合わせでは、出生率は 2015 年に策定された三種町人口ビジョンの推計に準じながらも、より緩やかに回復すると仮定し 2040 年には 1.94、2045 年以降は 2.07 へと段階的に上昇させる設定とした。10 代後半の流出率は現状の半分となるように設定した（詳細は参考資料に記載）。10 代後半の流出率を半分に抑制するという仮定は現実には多くの困難が予想される。しかしながら、この部分を具体的に検討する端緒となることを期待しこの設定とした。定住増加数の対象は 20 代前半夫婦、30 代前半子連れ夫婦、60 代前半夫婦の 3 世代として毎年各 4.7 組の誘致数とした。以上の条件設定で、出生率、流出率、定住増加数の 3 要素を組み合わせた人口安定化シナリオを検討する（下表参照）。

表 人口安定化シナリオの設定数値

合計特殊出生率（％）		10代後半流出率（％）		定住増加数・率/年		
2020～2025年	1.52		現状	設定値	各世代（世帯）	4.7
2025～2030年	1.63	男性	37	18	合計世帯数（世帯）	14.1
2030～2035年	1.73	女性	44	22	合計人数（人）	32.9
2035～2040年	1.83				2020年人口比（％）	0.96
2040～2045年	1.94					
2045年以降	2.07					

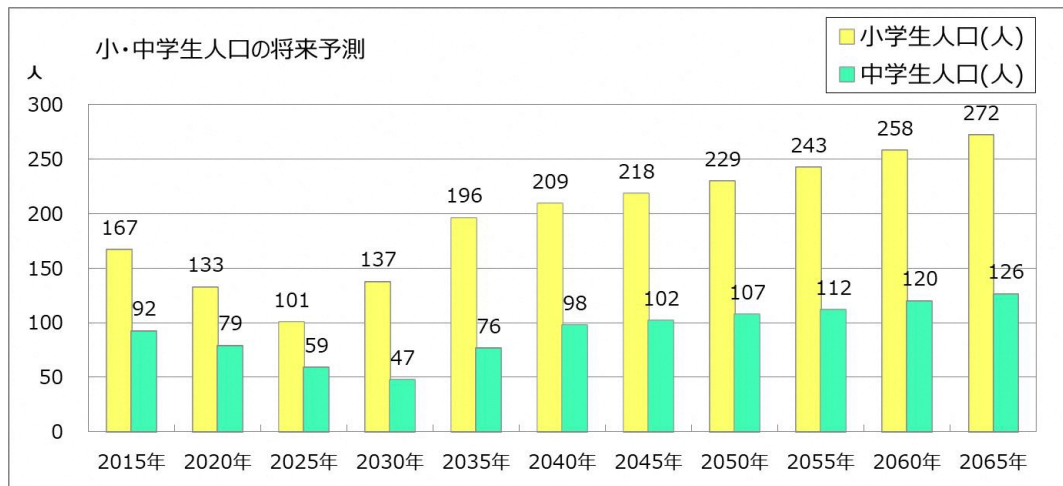
注：20 代前半夫婦は 1 組（世帯）2 人、30 代前半子連れ夫婦は 1 組（世帯）3 人、60 代前半夫婦は 1 組（世帯）2 人と設定。

i. 人口と高齢化予測



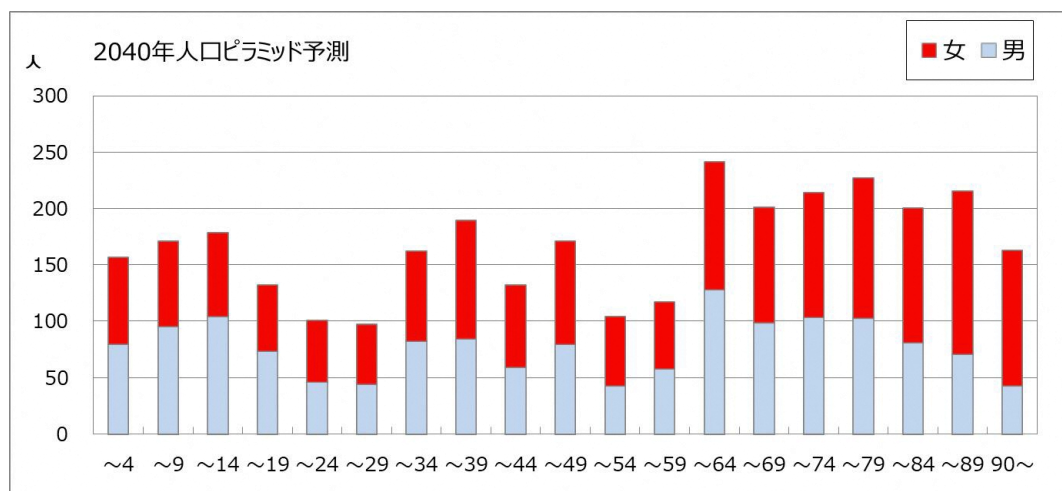
人口総数、高齢化率とも、長期にわたり安定化が達成される。

ii. 小・中学生数予測



子育て夫婦や若者夫婦の継続的な定住が達成されれば小・中学生数は、2030年頃には増加に転じ2030～2035年には現在の小・中学生数を上回る程に回復すると推計される。

iii. 2040 年（20 年後）の年代別人口構成



60 代より高齢の層に厚みがあり、依然として 20 代は低位であるものの、30 代で人口の取り戻しがあり、その子ども年代にもピークが存在するような人口構成になると推計される。

⑥ ワークショップ（1回目）（人口安定化ワークショップ）

1) 目的

本業務の目的でもある具体的な定住促進策の検討には住民の参加が求められる。当ワークショップでは、住民の方々に地域の人口動態を再確認いただき、移住者がどのくらい増えれば地域の人口はどのように変化するのか具体的にシミュレーションいただいた。その上で目標とすべき移住者誘致数や地域人口の安定化を検討することを目的として行った。

2) 開催概要

■日時/場所/参加者

- ・日時 2020年9月3日（木）18：30－20：30
- ・場所 三種町琴丘地域拠点センター
- ・参加者 地域住民（16名）、三種町職員、秋田県職員等
A～Dの4班に町職員等が数名配置され、各班5名前後の構成

■実施・作業内容

- ・一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所の藤山氏による当日の作業内容等の概要説明
- ・人口動態の増減要因分析として自らの地区の2015年から2020年の各年代、男女別の人口動態（コーホート変化率）を確認し、その増減要因を分析
- ・人口推計シミュレーションプログラムを実際に体験し、人口安定化に向けた具体的な移住者数の検討

■当日の様子



3) 人口動態の増減要因分析

この作業では参加者に対して鹿渡地区の年代別コーホート変化率のグラフを提示しながら、各年代の増減要因を検討いただいた。各班の検討結果の要約・抜粋が次頁表である。

表 鹿渡地区における人口増減要因分析結果の要約・抜粋

年齢	人口増加要因	人口減少要因
0～4	生活基盤がある（学校、駅、店）	
5～9	35～39歳が親の子供が多い 子育て支援(高校生医療費、保育料 給食費補助)	
10～14		
15～19		進学後そのまま戻らない
20～24		跡取りではない 都会に憧れ 選択肢がない 就職・進学 女性が働きやすい職場が少ない 事務職や正規採用がない
25～29		賃貸が少ない 女性が働きやすい職場が少ない 事務職や正規採用がない 転職で出ていく 給料が安い
30～34		紹介できる空き家が少ない 住居（賃貸）不足 農業が大規模経営できない
35～39	子育てへの親の協力 体力に自信がなくなって戻ってくる 離婚し子連れで戻ってくる 自然な中で子育てしたい 検診無料 子育て助成 出産年齢が上がっている	
40～44		新築して他市町へ 再就職先がない 交流が少ない
45～49		交流が少ない
50～54		
55～59	スローライフを楽しみたい 親の介護	
60～64	退職（第二の人生）	集まることができる場所が少ない
65～		

この表からは10代後半～30代前半にかけての減少（流出）要因とその前後の年代（9歳以下、30代後半）の増加要因に意見が集中したことが分かる。減少要因としては働く場所（給料）、住居（移住者に紹介出来る物件がないという意見も含む）が挙げられている。増加要因は主にUターンが想定されており、町の子育て支援が充実していることと、親からの子育ての協力が得られることが挙げられている。

4) 人口安定化のシナリオづくり

次に人口推計シミュレーションプログラムを使用し 20 代前半夫婦、30 代前半子連れ夫婦、60 代前半夫婦の 3 世代の目標誘致数、合計特殊出生率目標、10 代後半流出率削減目標を検討いただいた。その際、現実的に達成したい現実版の目標と、可能ならばこれくらい来て欲しいという理想版の目標を立てていただいた。なお合計特殊出生率については 2019 年の 1.14 から 2045 年まで段階的にどのように上げていくかを、10 代後半流出率削減目標については現在の男性 37%、女性 44%をどの程度まで下げられるかを検討いただいた。その結果が下表である。

表 鹿渡地区における検討された人口安定化シナリオ

項目		班	A	B	C	D	単位
合計特殊出生率目標							
2019年1.14	現実版		1.44	1.37	1.80	1.42	%
→2045年	理想版		1.80	1.80	2.00	1.42	
10代後半流出率目標							
現在の数値	現実版		25,30	25,40	30,40	37,40	%
男性 37,女性 44	理想版		15,20	25,25	30,40	37,40	
誘致世帯数・人数/年 目標							
20代前半夫婦	現実版		3	2	2	1	組
	理想版		4	3	6	0	
30代前半子連れ夫婦	現実版		2	2	2	2	
	理想版		3	3	6	3	
60代前半夫婦	現実版		1	3	1	0	
	理想版		2	3	2	0	
合計人数	現実版		14	16	12	8	人
	理想版		21	21	34	9	

各班でシミュレーションした結果、様々な組み合わせが検討された。合計特殊出生率目標では現状の 1.14 という数値から現実版では C 班以外は控えめな目標になっている。10 代後半の流出率削減目標では理想版で半分以上の減少を目標にする班もあったが、現実版の目標値からは流出を止めるのは難しいと考えている住民が多いことが分かる。移住者誘致目標では現実版、理想版のどちらもほとんどが 0～3 組という数に落ち着いている。A 班は流出率を抑えながら、若い世代を中心に移住者増を目指しており、B 班も同じような考えだが、60 代夫婦も若者夫婦と同じだけ誘致するとしている。C 班は流出率よりも誘致数に注力する検討を D 班は流出率、誘致数ともに最も低い目標となったが、30 代夫婦

の誘致には積極的な検討結果となった。

現実版の中で最も人口減少が抑えられた A 班の検討結果を次に示した（20 代前半夫婦 3 組、30 代子連れ夫婦 2 組、60 代前半夫婦 1 組）。その予測結果は高齢化率は落ち着いていくが人口減少の歯止めには至らないというものであった。小・中学生数も一旦、増加に転じるが徐々に減少していくと予測された。各班とも現実的には人口の安定化は難しいという意識を持っているものと考えられた。

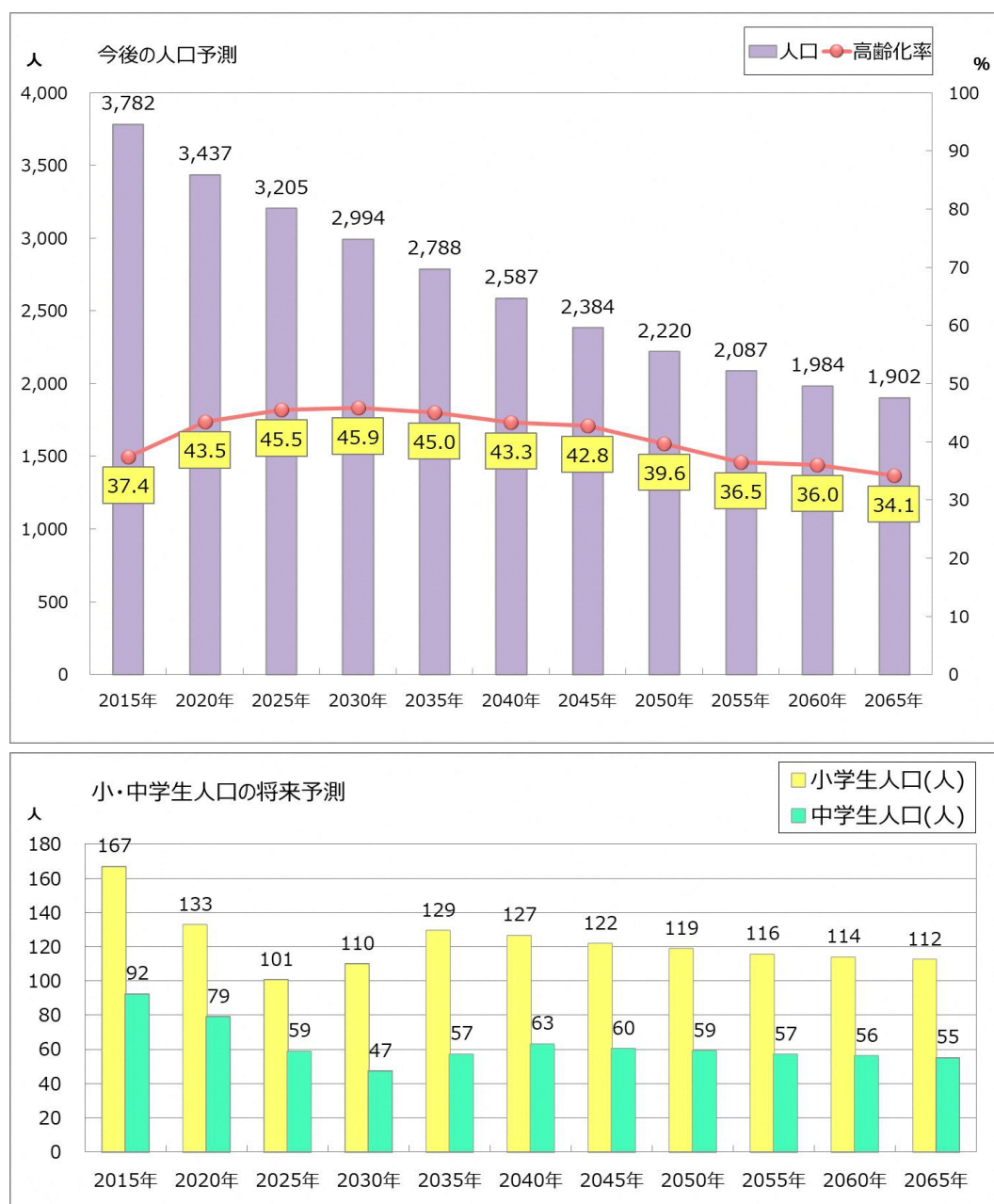


図 鹿渡地区 A 班現実版の検討結果 人口と高齢化予測（上）と小・中学生数予測（下）

5) まとめ

本ワークショップでは参加された住民の方々に対して、地域の人口動態を今一度、確認する機会として最新情報を提供し認識、共有いただいた。人口減少が現状のまま推移した

場合のシミュレーションを見ることで、ある種の危機感を直感してもらうということも、ワークショップの目的の一つである。そうした中で試行錯誤しながら最低限、これくらいなら呼び込めるのではないかという数値も探っていただいた。しかし、そうした現実版の目標設定では人口の安定化は得られない推計結果となったことは、住民の方々にとって今後の人口減対策の在り方を身近に感じるきっかけとなったのではないかと考えられる。

⑦ ワークショップ（2回目）（地元天気図ワークショップ）

1) 目的

ワークショップ（1回目）を受けて、このワークショップでは地元関係図を基に地域の現状と定住促進を可能とする将来像について検討を行った。地域の行動計画（グランドデザイン）策定の一助、あるいは地域の拠点づくりや実際に移住者を呼び込むという動きを生み出す端緒となることを念頭に置いている。実施地域における今後の検討材料として活用いただきたい。

2) 開催概要

■日時/場所/参加者

- ・日時 2020年11月12日（木）18：30－20：30
- ・場所 三種町琴丘地域拠点センター
- ・参加者 地域住民（16名）、三種町職員、秋田県職員等

A～Dの4班に町職員等が数名配置され、各班5名前後の構成

■実施・作業内容

- ・一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所の藤山氏による当日の作業内容等の概要説明
- ・地元天気図ワークショップとして現状と定住促進に向けた地元天気図の作成と地域の定住促進策の検討（テーマ 30代女性が定住するとしたら）
前半は地域の現状や課題を確認するため、施設、組織等について強みや弱み、関係性を検討し現時点での地元天気図を作成
後半は前半で確認した地元天気図にどのような要素が加われば、30代女性が移住・定住しやすくなるのかを検討し将来展望を加味した地元天気図を作成

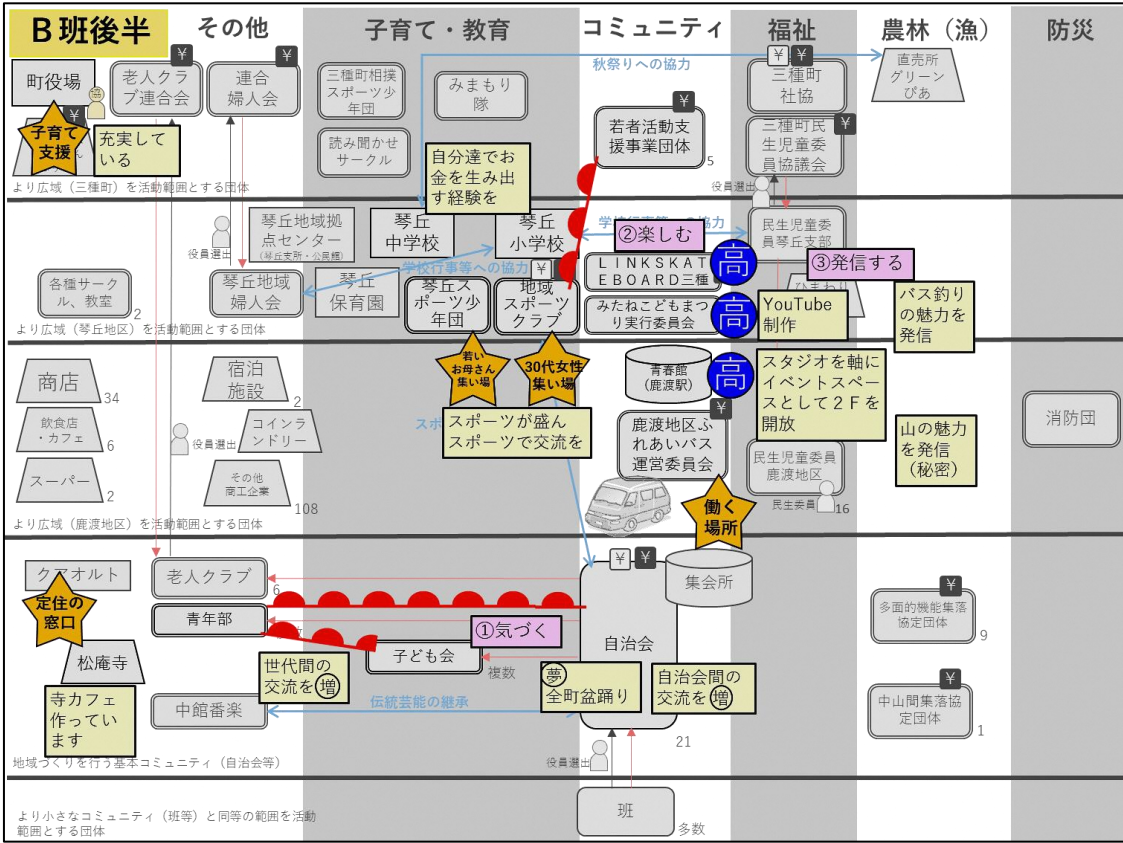
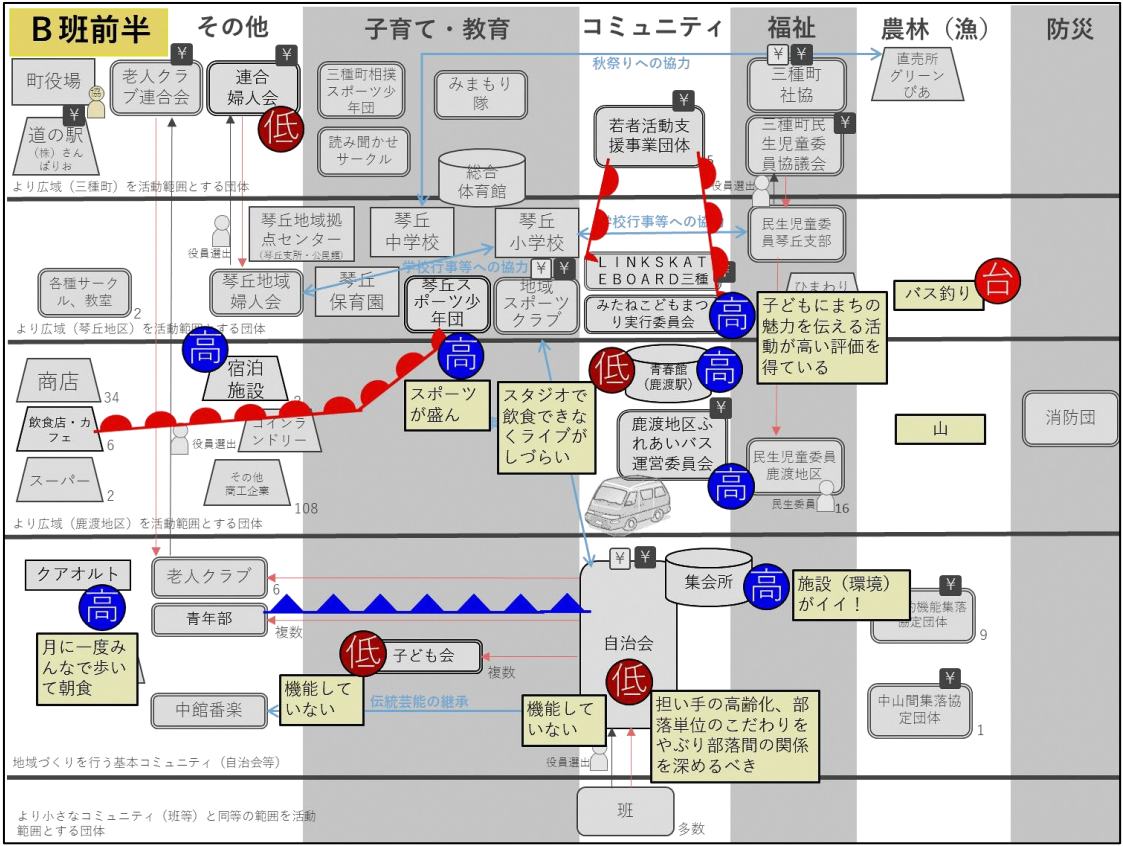
■当日の様子



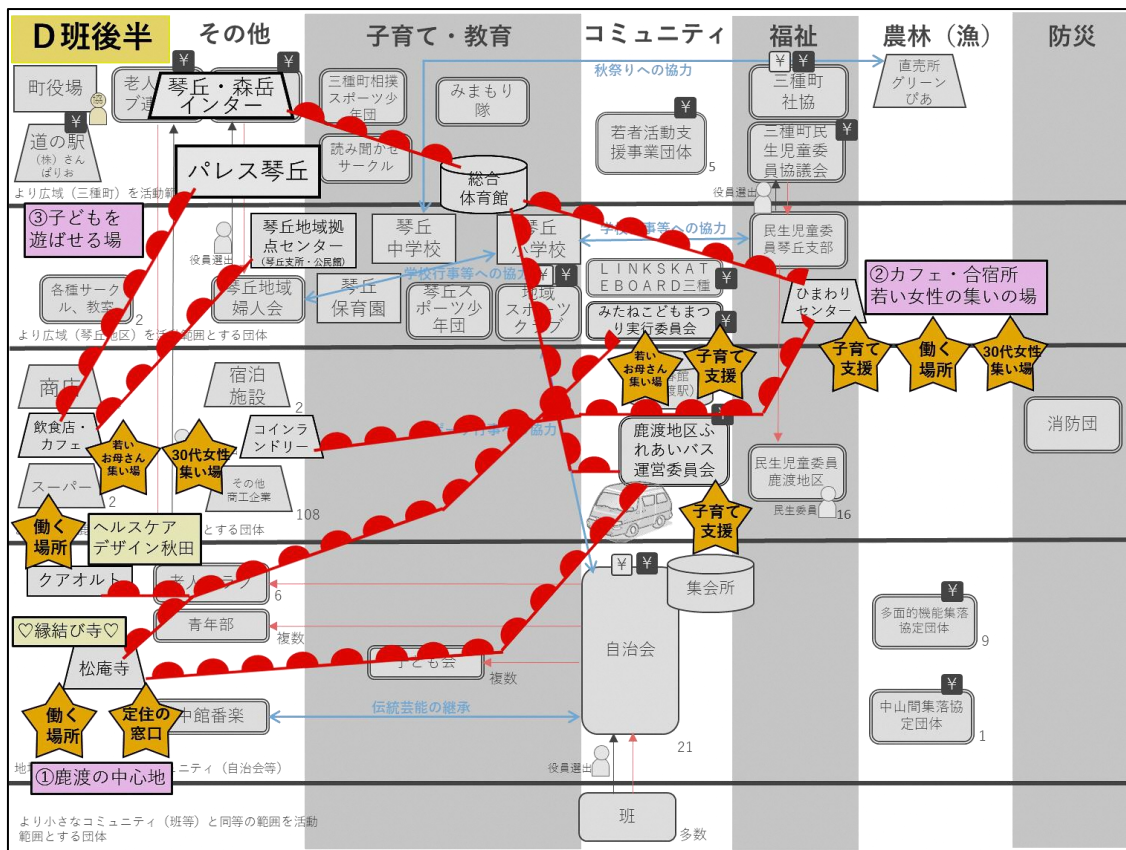
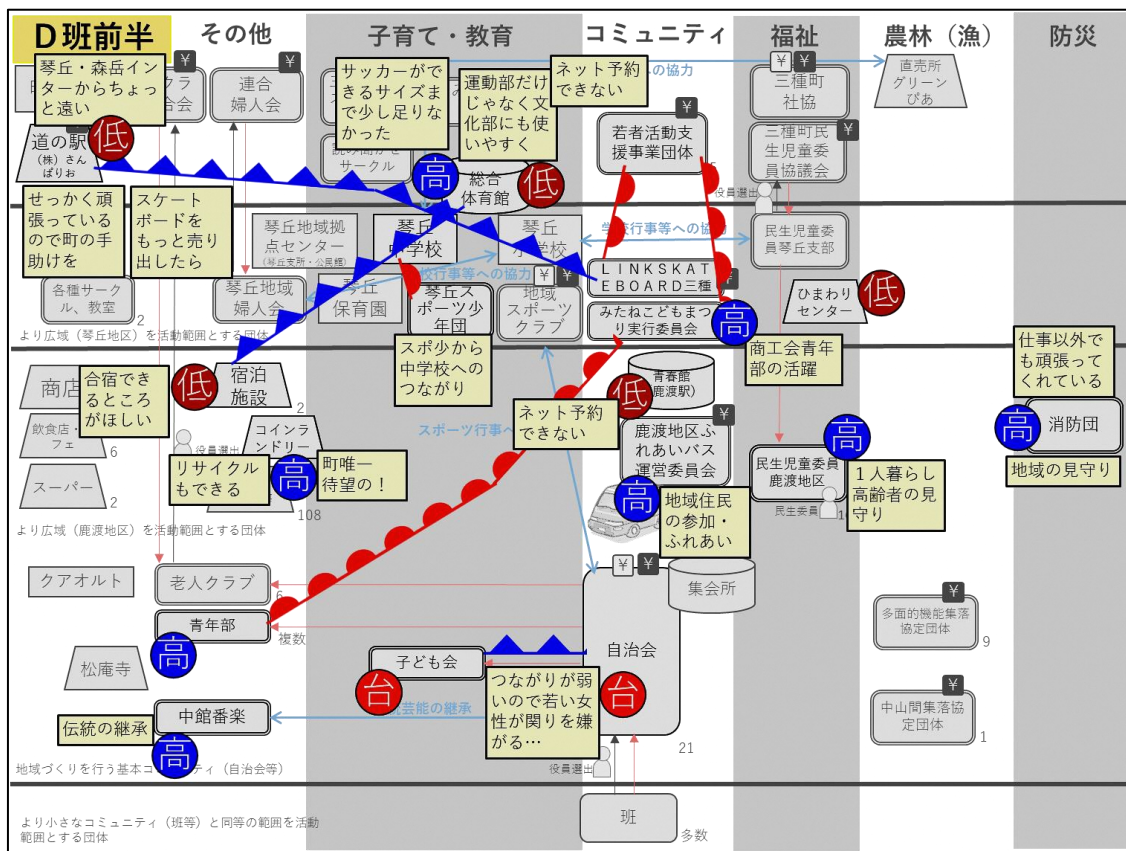
3) 検討結果

鹿渡地区では4班構成で作業が行われた。その中の例として30代前後の男性メンバーが大半だったB班と主に30～40代の女性メンバーが大半であったD班の検討結果を表示する（「④モデル地区（三種町鹿渡地区）の概要」に掲載した地元関係図と併せてご覧いただきたい）。

B 班の地元天気図（上半・下半）



D 班の地元天気図（上半・下半）



4) まとめ

地元天気図を提示した B 班、D 班について概略を記載したい。

B 班はみたねこどもまつり実行委員会のメンバーや地域おこし協力隊等地域に元々、目が向いている若手の男性が多い班である。前半の検討では琴丘スポーツ少年団、青春館（音楽スタジオ）、みたねこどもまつり実行委員会等自らが関わる主体に高評価を与えている。その他、師匠とされるベテラン住民を通して山や川等の自然から学ぶことがあるとしている。また、関わりはなくともふれあいバス実行委員会にも評価が高い。評価が低い主体はいくつかあるものの、特に自治会については若者が参画していないこと、自治会間での交流がないことについて意見を持っている。

後半ではスポーツ関連の主体が盛んなので、女性の集う場として整備することや寺カフェを間もなくオープンする松庵寺に移住相談の窓口を置くという案が出された。特に力点を置くべきとしたのは自治会間での交流を増やすことで、その交流の最終段階が全町盆踊りであると目標にしている。今までになかった取組の必要性に気づき、またこれまで同様に行ってきたこどもまつり等では一層、楽しみ、そして発信するという、「気付く」、「楽しむ」、「発信する」ということがコミュニティの維持・活性化に重要であり、こうした地域でなければ人は呼び込めないのではないか、という検討結果であった。

D 班は 30～40 代の女性が多いグループで、前半の検討では、琴丘スポーツ少年団、総合体育館、中館番楽、みたねこどもまつり実行委員会等子育て世代にとって有益な主体が高評価であった。また、B 班同様にふれあいバス実行委員会も評価が高く、住民のふれあいの機会をつくっているという評価であった。合宿する施設が少ないという点に低い評価があり、こちらも子育てに関わる不満であると推測出来る。また自治会に関しては台風マークを付けており、現状では若年女性との関わりは薄い、現在は停滞気味の子ども会からアプローチし関係を深めていくことが出来れば期待が持てるのではないかと考えている。

後半では地区内で信望ある松庵寺に定住の窓口を担ってもらいたいとした。また、かつては合宿等で宿泊出来たひまわりセンター（三種町琴丘国民健康保険高齢者保健福祉支援センター）に合宿機能を復活させ、カフェを併設し女性の集まれる場所として提案した。その他、既存施設を活用して子どもの遊び場も必要であるとした。

掲載していないその他の班について簡単に記載する。前半では総合体育館やスポーツクラブ等、スポーツに関わる事や、健康増進に関わる町が行っているクアオルト事業への評価が高かった。また、産地直売グリーンぴあを含む道の駅に対して、集客力と情報発信力に高い評価であった。評価が低いのは前述した班と同様に自治会の他、婦人会、青年会、子ども会に対してはメンバーがいない（少なくなった）ということが最大の弱点であるとした。後半ではスポーツ施設を集客の目玉にして宿泊施設の充実を図り、そこに雇用を生み出す案や子どもの遊び場と同時に大人の遊び場をつくり、同年代であっても持てなかった交流や年代を超えた交流を生み出すことが大事であるという考えが示された。

⑧ 三種町報告会の開催概要

1) 目的

コミュニティ生活圏形成事業の概要と鹿渡地区での取組の成果を基に、手法や手応えを三種町全体に発信・共有する目的で行われた。

2) 開催概要

■日時/場所/参加者

- ・日時 2020年12月12日(土) 13:30-15:30
- ・場所 三種町琴丘地域拠点センター
- ・参加 33名

■次第

第一部 講演 一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所 所長 藤山 浩氏
2020年代は田園回帰の時代

～三種町の地区別人口予測の概要と全国的な先進事例の紹介～

第二部 パネルディスカッション

コミュニティ生活圏の形成に向けて

～今こそ定住と暮らしの土俵をつくる！～

(1) 鹿渡地区からの取組報告

報告者	鹿渡地区	渡辺 英心氏
	鹿渡地区	児玉 真紀氏

(2) パネルディスカッション

テーマ1 次世代の定住増加の一番課題となっていること

テーマ2 次世代の定住増加に向けて一番力を入れたいこと

テーマ3 集落同士が連携し、子育て、福祉、農林分野等を地域ぐるみで
つないでこんな仕組みをつくりたい

ま と め 今後に向けての抱負を漢字一文字で

コーディネーター 一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所

所長 藤山 浩氏

鹿渡地区 渡辺 英心氏

鹿渡地区 児玉 真紀氏

三種町 地域おこし協力隊 湯沢 晃平氏

三種町企画政策課 見上 豪紀氏

■当日の様子



3) 内容紹介

本報告会では一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所所長藤山浩氏より本事業に関連して「2020年代は田園回帰の時代」という演題で講演いただいた。その後、ワークショップ参加者に成果を発表いただいた。パネルディスカッションでは地元住民等、4名の方々に登壇いただきテーマに対してキーワード方式で、その意味するところを説明いただく形式で執り行った。このパネルディスカッションの内容について抜粋し要約する。

テーマ1 次世代の定住増加の一番課題となっていること

湯沢氏キーワード 「未来のビジョン」

将来ここで家庭を持ちたいと考えたとき、明るい未来が描けないと来てくれる相手にも言いにくい。「良い所だからおいでよ」とまだ、言える感じではない。

見上氏キーワード 「多様な仕事」

なりたい職業がないから三種町のことが好きでも出ていく若者が多いということを知ったので、多様な仕事がないということが課題ではないかと思っている。

テーマ2 次世代の定住増加に向けて一番力を入れたいこと

渡辺氏キーワード 「気づく 楽しむ 発信する」

自分たちが地域のすばらしさに気付き、世代を超えて楽しみ、さらにそれを自分達だけに留めないで発信することで、選んでもらいやすくなるのではないか。

児玉氏キーワード 「親の様な存在」

子育てしている女性の相談を受けたり、時には厳しいことを言ってくれたり、緊急時には子どもの世話をしてくれる母のような存在が必要だと思っている。

テーマ3 集落同士が連携し、子育て、福祉、農林分野等を地域ぐるみでつないでこんな仕組みをつくりたい

見上氏キーワード 「提案制度」

住民の皆さんが町を良くするための様々な意見をお持ちだということが分かったので、それを汲み取る仕組みをつくっていききたい。

まとめ 今後に向けての抱負を漢字一文字で

渡辺氏キーワード 「解」

いろんなしがらみから自分を解き放つということと、お互いに理解し合うということが重要だ。

⑨ まとめ（成果と委託機関による方向性の提示）

鹿渡地区は他のモデル地区（特に山間の地域）と比較して、各自治会の弱体化は見られるものの、各々のコミュニティ活動が逼迫した状況にない。鹿渡地区単位の動きとしては地域内有償運行が前年度より始まったばかりである。将来的には既存の取組を充実させ鹿渡地区単位を基盤としたコミュニティ生活圏形成を見据えなければならないが、今回は参加者に対して現状を認知いただき、自分事として主体性を高めていく段階での取組であったと捉えることが出来る。

鹿渡地区の人口分析からは子育て世代の流入が確認される等、明るいデータも見られた。しかし、町の中心部とは言え、人口減少の歯止めにはなっておらず、今後は一層、高齢年代に偏重した人口構成になると予測された。

ワークショップ（１回目）の人口増減要因分析では、10代後半～30代前半までに様々な減少要因分析がされた一方、それ以降の年代（特に子育て世代）にとっては町の手厚い子育て支援施策やUターン者にとっての親の存在のありがたさが増加要因として挙げられている。これは移住者（特にIターン者）にとって親のような存在となる個人や組織によって安心して子育て出来る環境が担保されれば移住者の獲得につながることを示唆している。複数の参加者から町の子育て支援施策は他市町村に誇れるくらい素晴らしいと耳にしたので、人的なサポートの拡充というのが次の課題ではないだろうか。地域のベテラン女性による子育てサポーターのような取組の必要性がおぼろげながら見えてきた。人口安定化シナリオづくりでは多くの班において検討された数値目標では人口が安定化しないものとなった。中心地域であっても人口減少は急激に進んでおり、次の一手を考えなければならない、というような認識が共有される機会となった。

ワークショップ（２回目）では鹿渡地区の将来像を天気図に描いてもらった。その中で注目したいのは自治会の評価であった。ヒアリング等からもそこまでは困っていないという声があった一方、住民（特に若手や女性）との関わりが薄いことや、活動が少なくなっていること、自治会間の交流促進の必要性等が多数の班で検討された。自治会活動に関わる住民を増やしていかなければならないということや、自治会単位ではなく鹿渡地区単位でまとまる時期に来ているのではないかと、いう潜在的にあるいは、このワークショップを通じて芽生えた「コミュニティ活動への参加増進」、「鹿渡地区単位」という意識が共有されたことが成果の一つであった。

しかし、鹿渡地区では地域内有償運送やみたねこどもまつり実行委員会等、課題に対して必要に応じて（行政からの働きかけや支援を受けているものが多数あるが）個別に有志

が取組んでおり、高い評価を得ている。一足飛びに地域運営組織を立ち上げて、各取組を連携して、移住相談窓口を整備して、という時期ではないようだ。何よりも地区住民全体の意識の醸成が進んでいない。松庵寺における交流を促進するカフェのオープン等、まずは個別の動きを見守り支援する段階と考えられる。問題意識を持った住民による活動を町は応援し、その主体と関係性を築いていくことが大切である。町がこうした関係性を数多く持つことで様々な主体を有機的に関連させることが出来る。例えばワークショップ（２回目）では松庵寺に定住の窓口を置くという提案があったが、町に移住相談があった場合は担当者による形式的な説明や案内に加えて、お寺カフェに案内し、そこで地域の若きリーダーや先輩移住者を交えて地域の雰囲気を感じてもらいながら説明や相談を行うという仕組みに置き換えることが出来るのである。

事体が切迫する前段階で住民の方々から鹿渡地区がコミュニティ生活圏として認知され、そこに地域運営組織の必要性が感じられるように徐々に機運を高めていかなければならない。現状では鹿渡地区単位でのコミュニティ活動の中心となるような組織は存在していない。最も可能性があるのは鹿渡地区ふれあいバス運営委員会ではあるが、その可能性はいかほどか、可能性があるとするればどういった課題を乗り越えなければならないのか、検討を重ねていただきたい。そこではすでに活動している若手住民、きっかけとタイミング次第で参画したい女性住民にも目配りするべきである。差し当たっては参加者の方々からの提案を集約した地元天気図は是非とも活用いただきたい。全てデータ化してあるので、ブラッシュアップした後、行動計画（グランドデザイン）の策定に向けて取組み、鹿渡地区におけるコミュニティ生活圏形成の検討を深めていただきたい。

三種町の職員の方々は地域を良く知っており、住民とも頻繁に声を掛け合っていると見受けられた。鹿渡地区ふれあいバス運営委員会の設立に際しても町職員のOBに対してとは言え、町がメンバーを「一本釣り」したとのことであった。町職員が住民の熱意や関心事を把握しておくことや、住民との間に信頼に足るネットワークがなければ今後の取組はなされない。三種町においてはそういった心配は不要と感じられた。